



公益財団法人 広島平和文化センター
Hiroshima Peace Culture Foundation

〒730-0811 広島市中区中島町1番2号
TEL(082)241-5246(代表) FAX(082)542-7941 E-mail:p-soumu@pcf.city.hiroshima.jp
平成24年(2012年)9月/年3回発行 [URL]http://www.pcf.city.hiroshima.jp/hpcf/

NPT再検討会議準備委員会に合わせ 平和市長会議代表団がウィーン市を訪問

平和市長会議は、今年五月、オーストリア・ウィーン市で開催された二〇一五年NPT(核拡散防止条約)再検討会議第一回準備委員会に合わせ代表団(九カ国十三都市三十二人)を組織して訪問。NGOセッションでのスピーチ、ワークショップの開催、各国大使や国連関係者との面会等を通じ、被爆地の思いを伝えるとともに、核兵器廃絶に向けた取組の推進を要請しました。

また、ウィーン市役所及びウィーン国際センターで、平和市長会議加盟都市五千突破を記念する被爆の実相等に関するポスター展を開催しました。

に非核兵器地帯が創設されるよう努力することを求めました。また、松井一實・広島市長が推進しているNPT再検討会議の広島への誘致について、実現に向けた支援と協力を呼び掛けました。

五月三日(木)

田上市長をはじめとする平和市長会議代表団がウィーン市役所を訪れ、被爆の実相等に関するポスター展のオープニングに出席しました。

五月二日(水)

田上富久・長崎市長がNGOセッションにおいて平和市長会議を代表してスピーチを行い、各国政府代表に向けて、核兵器禁止条約締結のきっかけとなる合意が得られるよう努力すること、世界各地

五月四日(金)

ウィーン国際センターにおいてワークショップを開催し、松井広島市長が、被爆者の体験や思いを世界の人々と共有することの重要性や、二〇二〇年までの核兵器廃絶実現に向けた平和市長会議の取組強化等についてスピーチしました。このほか、田上市長、天野万利・軍縮会議日本政府代表部特命全権大使、NGO関係者が各々の役割についてスピーチを行いました。



平和市長会議主催ワークショップ(5月4日)
左から、田上・長崎市長、松井・広島市長、リーパー・本財団理事長

目次

NPT再検討会議に合わせ平和市長会議代表団がウィーン市を訪問	①～②	平和記念資料館平成24年度第1回企画展「基町一姿を変える広島開基の地」	⑧～⑨
「核兵器禁止条約」の交渉開始等を求める市民署名活動の展開	②	被爆体験記朗読事業の開催状況/被爆体験記等の収集・整理・公開状況	⑩
中国人民平和軍縮協会一行が来広/広島・長崎講座現地学習	③	多言語化とインターネットによる情報発信/日本語サポーター養成講座	⑪
被爆体験記「原子野を生きのびて」(兒玉 光雄)	④～⑤	交流施設オープンハウス/留学生のための防犯セミナー及び在留資格説明会	⑫
被爆67周年 平和記念式典	⑤	「姉妹・友好都市の日」記念イベント	⑬
第12回「ヒロシマガイド」/資料展「被爆直後の報告書」/被爆体験の継承にご協力を	⑥	「JETプログラムにおける国際交流員としての職務と責任」(クリス・キャメロン)	⑭
収蔵資料展「原爆に奪われた命一親の悲しみ・子の悲しみ」/「新着資料展」/資料調査研究会研究報告第8号を発行	⑦	「グリーン・レガシー・ヒロシマ・イニシアティブの誕生」(渡部 朋子)	⑮
		「平和の音色を届けて」(矢川 光則さんインタビュー)	⑯

松井市長は、各国大使や包括的核実験禁止条約機関連準備委員会（CTBTO）事務局のトート事務局長に面会した後、ウィーン国際センターで開催された被爆の実相等に関するポスター展の記念行事に出席しました。

この記念行事において、会場を訪れていた二〇一五年NPT再検討会議第一回準備委員会のピーター・ウールコット議長に「核兵器禁止条約」の交渉開始等を求める市民署名（四十七万八千三百三筆の目録と署名の一部）を提出し、具体的な交渉開始に向けての尽力をお願いしました。



「核兵器禁止条約」の交渉開始等を求める市民署名の提出(5月4日)

五月五日(土)

二〇二〇ビジョンキャンペーン協会役員会を開催し、平和市長会議加盟都市の拡大と都市や地域レベルでの活動の充実に向けた取組を進めることを確認しました。続いて平和市長会議運営基盤強化のための検討会議を開催し、運営経費負担のあり方や地域組織の設立等について意見交換を行いました。

五月六日(日)

松井市長は核兵器廃絶国際キャンペーン（ICAN）代表ティルマン・ラフ氏や他のNGO代表と面会し、平和市長会議の活動への理解を深めてもらうとともに、今後の連携・協力の可能性について協議を行いました。

(平和連帯推進課)

「核兵器禁止条約」の交渉開始等を求める市民署名活動の展開

平和市長会議では、核兵器廃絶に向けた国際世論の喚起や各国政



「核兵器禁止条約」の交渉開始等を求める478,303筆の署名

五月のNPT（核拡散防止条約）再検討会議の合意文書では、この条約について初めて言及がなされ、潘基文（ギムン）国連事務総長もその必要性を強調しています。

その早期実現を目指し、平和市長会議では、二〇一〇年十二月から「核兵器禁止条約」の交渉開始等を求める市民署名活動に取り組んでいます。昨年

十一月の平和市長会議理事会及び今年一月に広島市で開催した第一回平和市長会議国内加盟都市会議では、条約の交渉開始等を求める市民署名活動を加盟都市を挙げて展開することが決定されました。これを受け、広島市においては、

府等への要請活動を推進するため、二〇二〇年までの核兵器廃絶を目指す「二〇二〇ビジョン（核兵器廃絶のための緊急行動）」を策定し、その積極的な展開を図っています。

二〇二〇年までの核兵器廃絶を実現するための最も効果的な方法は、世界の全ての国が「核兵器禁止条約」を締結することです。「核兵器禁止条約」とは、核兵器の製造、保有、使用等を全面的に禁止する条約であり、二〇一〇年

市役所本庁舎・各区役所庁舎等に署名コーナーを設置し、広報紙での広報等を通じ市民への署名を呼び掛けています。さらに、広島県において、県庁舎に署名コーナーが設置されています。

こうした中、今年四月末までに事務局に届いた四十七万八千三百三筆の署名については、五月四日にオーストリア・ウィーンで、平和市長会議会長である松井広島市長から二〇一五年NPT再検討会議第一回準備委員会のピーター・ウールコット議長に提出しました。今後寄せられる署名についても、適宜国連に提出したいと考えています。

唯一の被爆国である日本や各国政府が「核兵器禁止条約」締結に向けた交渉を即時に開始するよう、私たち市民社会の側から力を合わせて世論を盛り上げていきましょう。皆様の御協力をお願いします。

【署名の方法】

平和市長会議ホームページ（<http://www.mayorsforpeace.org/>）からのオンライン署名または署名用紙のダウンロードにより署名していただけます。

(平和連帯推進課)



広島市役所市民ロビーに設置された署名コーナー

中国の平和NGOと連携を確認 中国人民平和軍縮 協会一行が来広

平成二十四年三月七日（水）から十日（土）まで、中国人民平和軍縮協会（略称「平縮会」）の代表団が広島を訪れました。

本財団は、アジアと平和交流を図ることを目的に、昭和六十三年（一九八八年）度に平縮会と交流を始め、以後相互訪問を行っており、平縮会一行の広島訪問は今回で十回目となります。平縮会は昭和六十年（一九八五年）に設立された中国の全国的な平和団体で、平成十四年（二〇〇二年）には国連NGOに登録されています。

平縮会代表団		
団 長	陳 懐凡	平縮会副秘書長
団 員	王 琳	中国国際交流協会アジア・アフリカ・オセアニア事務所副所長
〃	祖 春梅	平縮会プログラムマネージャー
〃	崔 国忠	平縮会職員
〃	蒲 庄怡	平縮会職員



広島平和記念資料館を見学する平縮会一行

松井一實・広島市長との懇談では、「被爆の実相に触れ被爆者の体験や平和への思いを共有し、中国の市民の皆様へ伝えてほしい。」と述べた松井市長に対し、団長の陳懐凡（Chen Huifan）平縮会副秘書長が「広島市民の平和への願いを中国へ持ち帰りたい。」と答えました。

また、一行は本財団の被爆体験証言者である笠岡貞江さん、梶本淑子さんとの懇談や、広島平和記念資料館及び国立広島原爆死没者追悼平和祈念館の見学、市民団体との交流、平成二十二年（二〇一〇年）度に北京市を訪問し平縮会と交流した広島市民平和友好訪中団員との懇談などを通じて、被爆の実相や核兵器廃絶と世界恒久平和の実現を目指す「ヒロシマの願い」を学び、平和問題への認識を深めました。

本財団からは、「二〇二〇ビジョン」の展開や平和市長会議への加盟促進、中国国内での「広島・長崎講座」の開設や原爆展の開催などについて協力を要請しました。（平和連帯推進課）

広島・長崎講座現地学習 インディアナポリス大学 セントラルコネティカット 州立大学（アメリカ）の 大学生が被爆地で学ぶ

広島市と長崎市では、被爆者のメッセージを人類共通の財産として、そこに込められた平和への「思い」を学問的に整理・体系化し、普遍性のある学問として若い世代に伝えるため、世界の大学での「広島・長崎講座」の開設・普及に取り組んでいます。

五月から六月にかけて、同講座を開設しているアメリカの二大大学が、それぞれに広島での現地学習を行いました。両大学ともに平和記念公園や広島平和記念資料館、中国軍管区司令部跡の見学、被爆体験証言の聴講を通して被爆の実相を学びました。また、国立広島原爆死没者追悼平和祈念館では、原爆を題材とした詩の朗読に耳を傾け、自らも詩を朗読する体験をしました。

五月十三日（日）から十八日（金）まで当地に滞在したインディアナポリス大学一行は、当財団のリーダー理事長から、平和市長会議や二〇二〇年までの核兵器廃絶に向けた取組について話を聞き、活発な質疑応答を行いました。

また松島圭次郎さんの被爆体験証言を聞き、鶴田マリさんのアメリカでの日系人収容所での生活についても学びました。

そのほかにUNITAR（国連訓練調査研究所）や放射線影響研究所、広島平和研究所での講義を聴講し、「原爆投下後、被爆による健康障害の危険性はいつまであったのか」「被爆者はどのように見られているのか」など、さまざまな質問が投げかけられました。



平和記念資料館を見学するインディアナポリス大学の一行

六月一日（金）から六日（水）まで滞在したセントラルコネティ



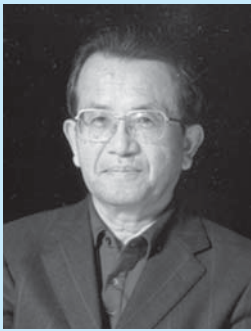
広島の大学生とセントラルコネティカット州立大学生とのグループディスカッション

カット州立大学一行は、梶本淑子さん、松島圭次郎さんの被爆体験証言を聴講したほか、旧日本銀行広島支店や袋町小学校平和資料館などの被爆建物を見学し、建物に残されたメッセージや被爆の爪痕をたどりました。

また、広島の大學生とのグループディスカッションを通じて、核兵器廃絶に向けて自分たちができること、日米関係のあり方などについて率直な意見交換を行いました。

両大学ともに二度目の現地学習という参加者もあり、ヒロシマについて学びたいという意欲の高さがうかがえました。

二〇一二年七月現在、「広島・長崎講座」は国内四十二大学、海外十六大学の計五十八大学で開設されています。（平和連帯推進課）



プロフィール
 [こだま みつお]
 1932年9月、広島市荒神町生まれ。比治山国民学校卒業。旧制広島一中1年生の時被爆。急性原爆症克服後は概ね健康。広島大学卒業後、郷里の役場に就職。農林省国際農友会派遣スイス留学を経て帰国後、牧場経営。西武流通グループ会社に転職して60歳の時直腸癌手術し退職。以後18回の癌手術を繰り返す。

被爆体験記

原子野を生きのびて

peace

本財団被爆体験証言者

兒玉 光雄

倒壊校舎からの脱出

私は県立広島第一中学校（広島一中）一年生の時、爆心地から八百五十メートル余の教室内で被爆しました。古い木造校舎は瞬時に崩壊し、建物疎開の交代要員として待機・自習していた一年生の約半数百五十名余は倒壊校舎の下敷きになりました。

私は奇跡的に脱出が出来、校舎の下から救いを求める友を数人救出しましたが、まだ多くの友が身動きできず助けを求めています。頭を割られたり圧死した友もいます。薄闇がはれてくると、校庭のプールサイドに多くの人影が見えます。救助応援を求めにプールに行く、それは市役所裏で建物疎開の作業に従事していた半数の一年生が、火傷を負った悲惨な姿でした。

水を求めてプールにやって来た多くの負傷者で、水は茶色に濁っていました。重傷者の姿に驚き救済を諦め、校舎に戻ると火が迫ってきました。煙の匂いを感じたのか、脱出できないと感じた友達は、君が代や校歌を合唱し始めました。助けることが出来ず、生きたまま焼かれていった友達の声は、生涯私の耳に焼き付いて離れません。

人間檻樓の行列と逃避行

煙に負われ逃げ惑う内に、日赤病院前の大通りに出ました。ここでは火傷をして手を前に垂らした幽霊の様な行列に出会いました。私もその列に加わり、「飛出した左眼」を掌に受けてよろよろと歩いて行く青年を見守るように進む内、急に私の足を掴む婦人の手を無情にも払いのけました。倒れた扉に腰まで挟まれて助けを求めているのです。横を行く負傷した兵隊の群れも知らん顔で通り過ぎました。何度も嘔吐をくり返しながら、気力を振り絞って御幸橋を渡ると、旧宇品線の丹那駅付近で失神し、気がついたときは民家に担ぎ込まれていました。夕方になり宇品線、芸備線を利用して深夜近くになって疎開している戸坂の自宅に辿り着きました。

戸坂駅から見る広島方面の天空は真っ赤に燃え盛り、学校の方に向けて置き去りにしてきた友に合掌して詫言が続けました。

死の淵を彷徨って

八月十五日の敗戦の詔勅は高熱にうなされながら聞きました。その頃は頭髮が殆ど抜け落ち、歯茎等の出血が止りません。ヒカドンには毒があるとの噂から、母は十薬（ドクダ

ミ）を煎じたり、生葉を蒸焼きして化膿した外傷に貼ってくれました。八月二十日頃から熱は四十二度に達し、全身に紫斑も出て、医者も治療法が分からず近づくかなくなりました。しかし九月になると不思議に熱も下がり始めました。

生き残った友を襲ったガン

当時の同級生三百余名の内、急性原爆症を克服して復学した者は、十九名でした。

しかし、高校二年の時止血不全で一名が亡くなり、大学の卒業を前にして一名が白血病で亡くなりました。それ以降、年齢を重ねていくにつれて、死亡した友の病名は皆、癌です。既に十六名が亡くなり、今では私を含め三名が重複癌と闘いながら生きています。

私の被爆による「異常染色体」

若年から癌に見舞われた友の中にあって、私は六十歳からの晩発生の癌でした。最初は直腸癌、三年後の胃癌も転移でなく原発性の癌と言われ、七十歳の甲狀腺癌も転移でなく、原爆特有の重複癌と言われました。皮膚癌は六十五歳から十六箇所の手術を繰り返しています。

放射線影響研究所の専門家からは、

私の場合、至近距離被爆のため、細胞百個中に百二個の転座という染色体の異常が見られ、このことからガンマ線四・六グレイの被曝線量と告げられました。ガンマ線四グレイが半致死量（二分の一の死亡率）だそうです。

語り継ぎたいこと

至近距離被爆者は大量の放射線によって、身体中の染色体を切断されました。異常染色体は復元の段階で間違った形で繋がったり、欠損したままの染色体は一生治らない、私は専門家から告げられました。その異常染色体は癌になりやすいとも教えられました。

放射線の怖さをもっと体験した私は、「核と人類は共存し得ない」ということを訴え続けていくことが、無念の死を遂げた友に代わり、生かされている私の使命だと心得て居ます。

- (*)1 染色体—遺伝情報を伝えるDNAなどで構成される生体物質。
- (*)2 転座—切断された染色体の一部が別の染色体に繋がってしまうこと。一個の転座で二本の異常染色体ができる。

被爆六十七周年 平和記念式典

―核兵器廃絶の願いと決意を広島から全世界へ―

被爆六十七年目の八月六日（月）、広島市の平和記念公園で市主催の「広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式」（平和記念式典）が行われ、遺族ら約五万人が参列して犠牲者の冥福と恒久平和を祈りました。

式典は午前八時に始まり、最初に松井一實・広島市長と遺族代表二人が、この一年間に亡くなったことが確認された五千七百二十九人の氏名が記帳された二冊の原爆死没者名簿を、原爆死没者慰霊碑の中の奉安箱に奉納しました。これで名簿登録者総数は二十八万九百五十九人、名簿総数は百二冊となりました。

続いて種清和夫・広島市議会議長の式辞、各代表による献花の後、原爆が投下された八時十五分に、遺族代表の原戸勇二さんと、ごども代表の岸本聖来

さんが平和の鐘をつき、参列者全員が一分間の黙祷を捧げました。

その後、松井市長が「平和宣言」を行いました。平和宣言の中で松井市長は被爆者から寄せられた被爆体験証言を紹介し、その辛さ、悲しさ、苦しみと共に、核兵器廃絶への切なる願いを世界に伝えたいと訴え、「世界中の皆さん、とりわけ核兵器を保有する国の為政者の皆さん、被爆地で平和について考えるため、是非とも広島を訪れてください。」と呼びかけました。

また、昨年三月十一日に発生した東日本大震災とそれに伴う原子力事故による被災者の、前向きに生きようとする姿を広島への復興期と重ね、「必ず訪れる明日への希望を信じてください。」と励ましの言葉を贈り、日本政府に対しては、市民の暮

らしと安全を守るためのエネルギー政策の確立を求めました。

そして最後に「この広島を拠点にして、被爆者の体験と願いを世界に伝え、核兵器廃絶と世界恒久平和の実現に全力を尽くすことを、ここに誓います。」と力強く宣言しました。

平和宣言の後、ごども代表の三保竜己君と遠藤真優さんが、「わたしたちは、平和をつくり続けます。仲間とともに、行動していこうと誓います。」と、「平和への誓い」を読み上げました。

野田佳彦・内閣総理大臣は「あいさつ」の中で、日本政府として、被爆体験を継承する取組を様々な形で後押しすると述べるとともに、国のエネルギー政策については脱原発依存の基本方針の下、中長期的に国民が安心できるエネルギー構成の確立を目指すことを述べました。

式典には四十一都府県の遺族代表、内閣総理大臣、湯崎英彦・広島県知事を始め、核保有国のアメリカ、イギリス、フランスの駐日大使を含む、

七十一カ国と欧州連合（EU）の代表も出席しました。

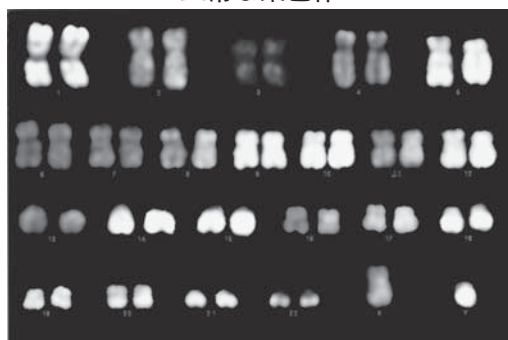
式典の様子はインターネットでライブ中継されました。また、当日夜十時二十分から原爆ドームを背景に松井市長が英語で平和宣言を行い、この様子もインターネットでライブ中継されました。

式典で読み上げられた「平和宣言」、「平和への誓い」の全文は「広島市ホームページ」(http://www.city.hiroshima.lg.jp/)の「原爆・平和」↓「平和宣言・平和への誓い・平和に関する要請等」から閲覧できます。「平和宣言」は八カ国語（アラビア語、中国語、英語、フランス語、ドイツ語、ハンゲル、ロシア語、スペイン語）の翻訳版もあります。

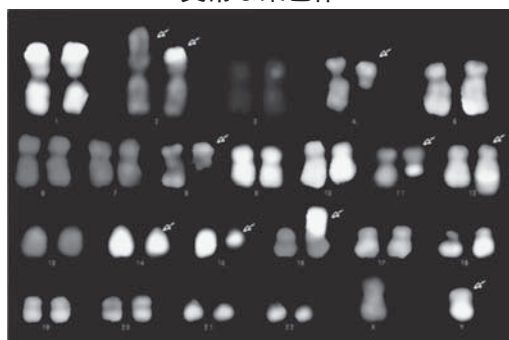
また「平和宣言」は「広島平和記念資料館ウェブサイト」(http://www.pcf.city.hiroshima.jp/)の「平和宣言」からも閲覧できます。

(総務課)

正常な染色体



異常な染色体



兒玉さんから採取された染色体の写真。左の正常な染色体と比べ、右の写真では、10本の異常染色体が見られる。(矢印の付いたもの)

観光事業従事者研修会

第十二回

ヒロシマ・ガイド

本財団は、広島平和記念資料館などで第十二回「ヒロシマ・ガイド」を三月九日（金）に開催しました。

この事業は、広島への来訪者に被爆の実相や核兵器廃絶と世界恒久平和を願う「ヒロシマの心」を正しく伝えてもらうため、広島平和記念資料館や平和記念公園などを案内するバスガイドや観光タクシードライバー等観光事業従事者の方を対象として、



ヒロシマピースボランティアから、平和記念公園内の案内を受ける研修会参加者

学習の機会を提供するもので、広島県内の十二社九十五人の参加がありました。平成十三年度から開催し、今回で十二回目となります。

研修では、ヒロシマピースボランティアによる広島平和記念資料館内や平和記念公園内の案内を受けました。続いて、国立広島原爆死没者追悼平和祈念館を訪れ、同館職員による館内の説明を受けた後、朗読ボランティアによる被爆体験記の朗読、本財団の被爆体験証言者・森田節子さんの被爆体験講話を聞きました。

終了後、参加者からは「このような機会を設けていただき大変勉強になった」、「今後もぜひ続けていただきたい」などの感想が寄せられました。

（平和記念資料館 啓発課）

資料展 「被爆直後の報告書」

広島平和記念資料館では、被爆直後に行われた原子爆弾被害

の調査活動を紹介する資料展を開催しました。

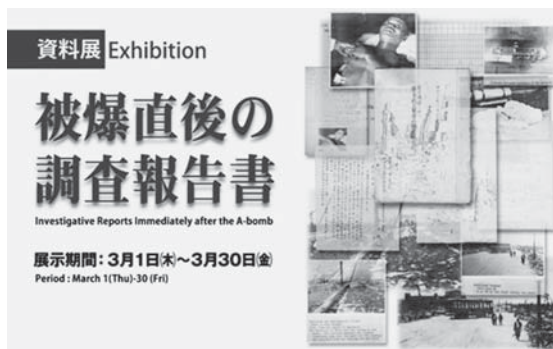
日本政府が作成した広島・長崎の原子爆弾災害に関する唯一の公式報告書である「原子爆弾災害調査報告」全五冊（日本学術会議・原子爆弾災害調査報告刊行委員会編、昭和二十六年八月二十八日発行）が、昨年八月から十一月にかけて順次復刻されました。

この復刻にちなみ、また、資料館企画展「広島、1945」写真が伝える原爆被害」との連携を図って、資料展「被爆直後の報告書」を、三月一日（木）から三月三十日（金）まで、資料館東館地下一階ホワイエで開催しました。

この資料展では、「原子爆弾災害調査報告」に収録されており、かつ、当館が収集・保管している二種類の報告書の原本、つまり、海軍呉鎮守府調査団の「広島市二於（お）ケル原子爆弾二関スル調査（一般的調査）」と陸軍軍医学校（東京）の「原子爆弾二依（よ）ル広島戦災医学的調査報告」に焦点を当て、報告書の概要や写真を大

見学した方からは、「原爆の本質を突き止め、対策を講じようとした研究者の熱意を感じる」との感想がありました。

（平和記念資料館 啓発課）



資料展のタイトル・パネル

被爆資料、原爆死没者の氏名・遺影、被爆体験記募集 被爆体験の継承にご協力を

広島平和記念資料館と国立広島原爆死没者追悼平和祈念館は、被爆体験を継承するための貴重な資料の収集を行っています。皆様のご協力をお願いいたします。

●被爆資料―被爆された時に身につけられていた衣服など、被爆の事実を直接ものがたる実物資料。

●氏名・遺影―原爆死没者の氏名・遺影（氏名のみ）の登録も可能。

●被爆体験記―被爆者の体験記や、遺族・友人の追悼記など。

【お問い合わせ】

●被爆資料について―広島平和記念資料館 学芸課

☎（082）241・4004

●氏名・遺影、体験記について―国立広島原爆死没者追悼平和祈念館

☎（082）5433・6271



遺骨代わりのブラウス 寄贈／にのみやたかあき二宮尊明氏

収蔵資料展

原爆に奪われた命 —親の悲しみ・子の悲しみ— を開催しています

「収蔵資料の紹介」コーナーでは、広島平和記念資料館で収蔵している約二万一千点の資料の中から、半年ごとにテーマを定め、展示替えを行っています。

一九四五年（昭和二十年）八月六日、一発の原子爆弾により広島市は廃墟と化しました。地獄のようなその町で、体を焼かれ、放射線を浴び、その年のうちに約十四万人もの命が奪われました。亡くなったひとりひとりにはかけがえのない人生があり、かけがえのない人があったのです。

今回の展示では、悲しみの詰まった五点の遺品を紹介しています。

展示場所 平和記念資料館 東館三階ミュージアムショップ前

展示期間 平成二十四年四月六日（金）～平成二十四年十月三日（水）

展示資料 遺骨代わりのブラウス、手帳など実物資料五点他

【お問い合わせ】
広島平和記念資料館 学芸課

☎（082）241・4004

新着資料展

広島平和記念資料館では、原爆被害の実相を伝えるための貴重な資料として、被爆者やその遺族が所蔵している被爆資料の収集に努めています。平成二十三年度は、新たに四十八人の方から、二百六十八点の寄贈がありました。その一部を展示しています。

展示場所

広島平和記念資料館 東館地下一階 展示室（四）

展示期間

平成二十四年六月二十一日（木）～平成二十五年六月十六日（日）



姉の形見のかばん 寄贈／ふじもりひろこ藤森弘子氏



弟の形見となった弁当箱 寄贈／かのうつねはる加納恒治氏

展示資料

平成二十三年度に寄贈された被爆資料等百一点

【お問い合わせ】

広島平和記念資料館 学芸課
☎（082）241・4004

広島平和記念資料館 資料調査研究会研究報告 第八号を発行します

広島平和記念資料館資料調査研究会の調査研究活動の成果をとりまとめた「広島平和記念資料館資料調査研究会研究報告」第八号を九月下旬に発行します。

執筆者と論文のテーマは次のとおりです。

- ◆石丸 紀興（広島諸事・地域再生研究所代表） 広島戦後の復興における計画思想としての平和記念都市の提案・形成・成立過程に関する研究
- ◆高橋 博子（広島市立大学広島平和研究所 講師） 海外被爆資料についての研究：米軍病理学研究所（AFIP）を中心に
- ◆水本 和美（広島市立大学広島平和研究所 副所長） NPT 10年ぶり最終文書採択で流れ変わるか？—2010年の核をめぐる動向と論調—
- ◆岡田 英治（部落解放同盟広島県連合会副委員長） 平和と人権—部落解放運動の視点から
- ◆西迫 利孝（広島県教職員組合書記長） 「過ちは繰返しませぬから」—すべての人は等しく尊いということを原点に—

研究報告は広島市内の図書館でお読みいただくことができます。希望者（先着百部）には、無償配布します。着払いでの郵送も可能です。

【お問い合わせ】
広島平和記念資料館 学芸課
☎（082）241・4004

広島平和記念資料館平成24年度第1回企画展

基町

姿を変える広島開基の地

■期間：12月12日(水)まで

■会場：平和記念資料館 東館地下1階展示室(5)

■軍都の中心

一八七一年(明治四年)、広島城の本丸に鎮西鎮台の第一分営が設置され、一八七三年(明治六年)に第五軍管広島鎮台、一八八六年(明治十九年)には第五師団と名称を変え、広島軍隊は増強されていきました。基町はさまざまな軍関連の施設で埋め尽くされるようになりました。

○大本営の設置

大本営は天皇のもとで戦争を指導する最高の機関です。一八九四年(明治二十七年)八月、日清戦争が始まった当初は東京に置かれていましたが、戦況の変化に迅速に対応するため、大陸への出兵基地となっていた広島に移されました。明治天皇は、一八九四年(明治二十七年)九月十五日から一八九五年(明治二十八年)

広島城の外堀と太田川に囲まれた城郭一帯は、「広島開基の地」であることから、基町と呼ばれるようになりまし。明治時代から昭和初期にかけて、基町には軍の施設が次々と設けられ、軍都を象徴する町となっていました。

一九四五年(昭和二十年)、原子爆弾の投下により、爆心地に近かった基町は壊滅的な被害を受けます。被爆後、市の中心に現れた広大な土地は性格を一変します。家を失った人々の住宅地として、また、公園、図書館、市民球場など、人々が集う場所として、広島復興に大きな役割を果たしました。

今回の企画展では、広島歴史の縮図ともいえる基町の、今日までの歩みをたどります。



錦絵「広島県御安着之図」
広島城内の大本営に入る明治天皇を描いた錦絵。
所蔵／広島市公文書館

■壊滅

中国軍管区司令部を中心に、歩兵・砲兵・輜重兵の各兵舎や、その



招魂祭 1934年(昭和9年)
作者／上西 薫氏

年)四月二十七日まで、基町にある第五師団司令部を大本営として、軍隊を指揮しました。

○臨時帝国議会の開会

一八九四年(明治二十七年)十月十八日、西練兵場に建設された仮設の議事堂で、明治天皇臨席のもと開院式が行われました。

○市民の憩いの場

基町はさまざまな軍事施設が並ぶ軍用地ではありませんでしたが、市民に開かれた場所でもありました。

広島城の南側、大手郭に設けられていた西練兵場では、戦死者の慰霊のため広島招魂祭が行われました。競馬やオートバイレースが開催され、屋台や見世物小屋で賑わい、市民の大きな楽しみになっていました。

○急ごしらえの住宅

住宅営団が一九四六年度(昭和二十一年度)中に七百四十三戸を

■再建から再開発

基町は爆心地に近く、壊滅的な被害を受けました。国有地であった広大な旧軍用地は、戦後は公共用地として計画されました。

基町の東半分は官公庁や病院、学校などが整備される一方で、西半分の大半は公園用地とされました。しかし、原爆により住宅を失った多くの市民のために、公園用地とされた場所は応急的に住宅地とされることになりました。

部下の遺品一革財布・メダル・腕時計
中国軍修理所
修理下り出し、
分たもです。
寄贈／八東要氏



他陸軍病院などの施設は倒壊、炎上し、基町は壊滅状態となりました。



大田川土手沿いに密集するバラック住宅
1962年(昭和37年)7月
所蔵／中国新聞社

○不法住宅の建設

公的な住宅を数多く建設しても、住宅不足は深刻でした。土地を持たない人々は、やむを得ず河川敷など

建設したのをはじめ、市営住宅が千三十八戸、県による引揚者住宅が三十四戸建設されました。一九四九年(昭和二十四年)ごろには、合わせて千八百十五戸の住宅が建設されていました。



基町の公営住宅
1947年(昭和22年)8月～10月17日
撮影／菊池俊吉氏 提供／菊池徳子氏

に住宅を建て始めます。相生橋東詰から三篠橋東詰までの約一・五キロメートルにおよぶ太田川土手沿いに、不法住宅が集中して建てられました。

○火災
道路が狭く、消火施設も不十分で、ひとたび火の手が上がると大火災になりました。

○再開発へ
基町一帯はもともと中央公園として計画されていましたが、広島市は一部分を住宅用地に変更し、老朽化した住宅の代わりに中層住宅団地を建設することになりました。

中層住宅団地の建設は千八百九十四戸の予定でした。しかし、公的住宅の建て替えだけでは、老朽化した不法住宅を整理することができず、新たな再開発が必要となりました。

一九六九年（昭和四十四年）三月十八日、国は、「広島市基町地区」の名称で基町西側一帯を改良地区に指定し、約十年間に及ぶ基町地区の再開発がスタートしました。

○再開発が終わって
一九七八年（昭和五十三年）九月に最後の高層アパートが完成し、基町地区再開発事業が終わりました。基町地区に建設された高層住宅は二千九百六十四戸で、白島の長寿園地区に建設された高層住宅を含めると四千五百六十六戸にもなりました。

住宅だけではなく、ショッピングセンターや小学校、幼稚園、保育



原爆参考資料陳列室
1949年（昭和24年）9月25日
所蔵／中国新聞社

■にぎわいの場へ
基町の西側大半は公園用地として計画されました。その南側部分にはさまざまな文化施設やスポーツ施設が建設されていきました。

○平和への歩み
一九四九年（昭和二十四年）七月現在の相生通り沿いに建つ広島商工会議所の東隣りに中央公民館が建設



再開発事業が終了した基町
1978年（昭和53年）9月26日
所蔵／中国新聞社

所、その他中央集会所や集会室なども造られました。また、高層アパートの屋上には遊歩道や庭園が設けられ、市内や瀬戸内海の景色が望めるくつろぎの場所となりました。

○広島市民球場
一九五〇年（昭和二十五年）に広島カープが結成され、球団関係者や市民から、市の中心部への球場建設を求める声が上がりました。児童文化会館の北側、公営住宅が建っている場所や、西練兵場跡にあった広島護国神社跡地、合同庁舎建設予定地などが候補となりましたが、住民の立ち退き反対運動や、国との交渉に



再建が進む広島城天守閣
1957年（昭和32年）
所蔵／中国新聞社

され、その一室に同年九月、原爆参考資料陳列室が開設されました。被爆瓦など原爆関係の資料が展示され、現在の平和記念資料館の前身となりました。

○広島城
一九五八年（昭和三十三年）、広島復興大博覧会の会場の一つとして再建され、ほぼ被爆前と同じ姿を現しました。市民の身近な存在だった広島城天守閣は、基町のランドマークとして復元され、広島復興を見守ることになりました。

■そして、今
原爆による惨禍から目覚ましい復興を遂げた基町には大規模な商業施設が建設され、また、都心の公園には文化・スポーツ施設が整備され、日々多くの人々にぎわっています。新しい施設が整備されていく一方で、姿を消していくものもあります。戦後、広島復興を市民とともに支えてきた広島市民球場は、今、その役目を終え、ライト側外野スタンド



竣工した広島市民球場
1957年（昭和32年）7月
撮影／佐々木雄一郎氏 提供／塩浦雄悟氏

より難航しました。

一九五六年（昭和三十一年）七月、ようやく児童文化会館前の児童公園東南に建設することが決定し、財界からの寄付により一九五七年（昭和三十三年）七月に完成しました。

広島市民球場は、広島カープのホームグラウンドとしてのみならず、市民のレクリエーション施設としても利用されました。

【お問い合わせ】
広島平和記念資料館 学芸課
☎（082）241-4004

基町地区再開発事業完成記念碑にある「この地区の改良なくして広島戦後は終わらない」という言葉は、言い換えれば、基町の再開発が終わったことで、広島が本当の意味で戦後の復興を遂げたということを示しています。

しかしその一方で、今もひっそりと暮らしている被爆者の姿があります。かたくなに自分の過去を語らず生きている人々は、現在の復興をどう思っているのでしょうか。

私たちは、復興の陰で、原爆ですべてを失いながらも懸命に生きてきた人々の労苦があったということを決して忘れてはいけません。



現在の広島市民球場跡地
2012年（平成24年）5月
撮影／広島平和記念資料館 協力／株式会社広島マツダ

の一部を残し、新たなスタートを切るようにしています。

被爆体験記朗読 事業の開催状況

国立広島原爆死没者追悼平和祈念館では、当館で収集している被爆体験記を有効に活用するとともに、被爆体験を継承する新たな方法として、これからの時代を担う子どもたちに対し、朗読により被爆体験を伝えていく取り組みを平成十七年三月から実施しています。



修学旅行生への被爆体験記朗読会

市内及び近郊の学校・公民館等での出前朗読会及び海外からの来館者を対象とした英語による朗読会のほか、誰でも事前予約なしで自由に参加できる定期朗読会を毎月第三日曜日（一回目十一時から、二回目十四時三十分から、各四十分程度）に開催しています。

朗読会では、まず原爆被害の概要を紹介するビデオを視聴してから、ボランティアによる被爆体験記と原爆詩の朗読を聞き、最後に参加者自らに原爆詩を朗読してもらっています。

参加者からは、耳で聞き、声に出して読むことで、被爆の実相が臨場感を持って伝わり、被爆者の思いを共有できるとの感想をいただいております、好評を得ています。

開催回数は、平成二十二年度には二百十三回、平成二十三年度には二百四十八回と、年々増加しており、また、多くの団体に継続してご利用いただいております。

また、朗読会を全国で展開するため、朗読会を開催するために必要な、①原爆被害の概要ビデオ、②朗読する体験記・原爆

詩、③朗読マニュアルの三点で構成する朗読セットの貸出しも行っていきます。朗読セットを使用すること、皆さんの手で、町内会や子ども会など身近なところで朗読会を開催できます。（朗読会の開催及び朗読会セットの貸出しは無料）
（原爆死没者追悼平和祈念館）

被爆体験記等の 収集・整理・公開状況

国立広島原爆死没者追悼平和祈念館では、被爆の実相を後代に継承するため、広島と長崎の被爆者の方が書かれた被爆体験に関する手記・日記・書簡、被爆者の遺族・友人が書かれた追悼記、また、これらが掲載されている図書などの収集に努めています。

平成二十四年三月末現在、被爆体験記十三万二千九百七十一編を収集し、体験記閲覧室で公開しています。内訳としては、平成七年度に厚生省が収集した被爆体験記八万二千二百二十二編、平成十七年度に厚生省



被爆体験記閲覧室

働省が収集した被爆体験記一万七千七百六十六編、独自に収集した被爆体験記千八百三十五編、寄贈や購入による図書に掲載された被爆体験記三万八千五百八十八編があります。

また、来館者の目的に応じて被爆体験記を容易に検索・閲覧できるように、データベース化にも取り組んでいます。被爆体験記一編一編を読み込み、執筆者の被爆場所や所属、登場する他の被爆者や場所などを整理して、システムに登録しています。そして、体験記閲覧室の収蔵資料検索装置で、被爆者のお名前、被爆場所、年齢、学校名等様々な検索方法を提供し、来館者サ

ービスに努めています。一部の体験記については収蔵資料検索装置やホームページでもご覧いただけます。

なお、被爆体験記や図書の貸出し、複写サービスは行っておりませんので、体験記閲覧室内でご覧ください。

被爆者証言ビデオについては、平成十五年度から県外在住被爆者の収録を開始し、平成二十四年三月末現在、二百四十一名を収録しています。被爆者の高齢化が進んでおり緊急性は高く、今後も継続して収録していきたいと考えています。

国外在住被爆者については、平成十九年度から収録を開始し、これまで韓国、アメリカ、ブラジル、メキシコ、オーストラリア、カナダ、アルゼンチン在住二十七名を収録しています。

体験記閲覧室では、広島平和記念資料館が収録したものを含め千四百四十七人の証言映像を公開しており、おひとりおひとりの証言映像を収蔵資料検索装置で視聴することができます。映像の長さはお一人の証言につき二十分程度です。

（原爆死没者追悼平和祈念館）

多言語化とインターネットによる情報発信

国立広島原爆死没者追悼平和祈念館では、海外から多くの方が来館されることから、被爆体験記の翻訳や被爆証言映像の吹き替えを行っています。

被爆体験記については、英語への翻訳三百十五編、中国語及び韓国・朝鮮語への翻訳二百二十五編が体験記閲覧室の収蔵資料検索装置で閲覧できます。

また、被爆者証言ビデオについては、英語、中国語、韓国・朝鮮語の吹替えは各八十五本、英語で証言しているもの一本、韓国・朝鮮語で証言しているものが十本、字幕により視聴できるものは英語七百五十五本、



多言語化された被爆体験記

中国語百十三本、韓国・朝鮮語百十三本があります。これらも体験記閲覧室で公開しています。さらに、より多くの人に母国語で被爆の実相を伝えるため、被爆体験記六編を十六言語に翻訳しています。(英語、中国語、



平和情報ネットワーク

韓国・朝鮮語、フランス語、スペイン語、イタリア語、ポルトガル語、ドイツ語、ロシア語、タイ語、インドネシア語、フィリピン語、マレー語、アラビア語、ウルドゥー語、ヒンディー語)

これら、多言語化した被爆体験記や証言ビデオのうち、外部提供について同意が得られた被爆体験記や証言映像については、少しでも多くの方々に被爆の実相がお伝えできるよう、広島と長崎の両祈念館が共同運営しているホームページ「平和情報ネットワーク」(<http://www.global-peace.go.jp/>)へ積極的に掲載し、情報発信に努めています。(原爆死没者追悼平和祈念館)

広島市留学生会館では、会館に住む留学生のうち、
◎日本人と話したい
◎簡単なレポートなどを見てもら

日本語サポーター養成講座
留学生を支える
市民ボランティア

らえる人がほしい
◎日本の生活を知りたい
という希望を持つ留学生に、日本語サポーターを紹介する制度を設けています。
今年度上期にサポーターとなっていただけの市民ボランティアを募集したところ、二十人の募集に対して五十四人の応募がありました。この方たちを対象に平成二十四年五月十三日(日)に開催した養成講座には、このうち五十一人が参加しました。
参加者は、講師を務めた広島市立大学国際学部岩田一成准教授からボランティア



岩田一成准教授による講義風景

についての心構えを学び、正しい知識を得ることができました。
講座の内容は、次のとおりです。
①先輩サポーターの活動発表と質疑応答
②ボランティアの心得について
③文法指導について(日本語能力試験の問題を例に)
④グループでの作文

チェック(留学生の書いた作文を題材に)
⑤会話について
⑥登録について
講座には十代から六十代までの幅広い層から参加がありました。参加者にとって楽しく活動する参考になるとともに、この活動なら自分にもできそうだといい安心感と期待感を持っていただきました。
また、語学指導の経験が無い参加者が多く、日本語を見つめ直す機会にもなりました。(広島市留学生会館)

交流施設オープンハウス 留学生会館をより多くの方に 利用していただくために

広島市留学生会館は、平成十三年四月の開館から約十一年間に多くの方にご利用いただき、今年四月に利用者六十万人を達成しました。

十二年目を迎えた今年度は、さらに多くの方に会館を理解していただき、新たな利用者となっていたため、平成二十四年四月二十一日（土）、二階ホールで「交流施設オープンハウス」を開催しました。

※交流施設とは、一階の交流ラウンジ、二階のホール、研修室及び調理室を表します。

①留学生会館の概要説明

会館が留学生の生活支援、留学生相互の交流、留学生と市民との交流等多様な国際交流及び国際協力を推進することを目的として設置されたことを紹介しました。

②交流施設の利用案内

交流施設の利用方法や申し込

みの基本的なルール等について説明しました。

③交流団体の活動紹介

現在会館を定期的に利用している三団体（広島国際ホームステイクラブ、（社）日本産業退職者協会、白ゆり会）から、団体の概要、活動内容について発表していただき、参加者に会館利用の具体的なイメージを提供しました。

④国際交流のご提案

会館の利用方法の提案として、音楽や文化紹介・交流会、国際交流写真展、世界の料理体験などを例に挙げ、参加人数や必要経費、注意事項等についてわかりやすく解説しました。

⑤外国人向け日本語教室の見学

研修室で当日開催されていた外国人向け「みんなの日本語」教室にご協力いただき、授業風景を見学しました。

⑥施設見学、質疑応答

交流施設をはじめ、留学生の居住施設（居室、図書室、調理食事室）を見学しました。その後の質疑応答では各施設の利用状況（空き具合）や申込方法等について具体的な質問が寄せられ、参加者の関心の高さが

うかがえました。



調理室の利用方法を聞く参加者

オープンハウスは開館以来初の試みでしたが、当初の予想を上回る四十八人の参加がありました。

参加者のアンケートでは九十二％の方に「利用方法がよくわかった」と回答をいただきました。

活動拠点を他の施設から留学生会館に移す国際交流団体もあり、実りのあるオープンハウスとなりました。

また、参加者は留学生の居住施設も見学したことにより彼らへの理解を深め、より身近に感じる機会となりました。

（広島市留学生会館）

留学生のための防犯セミナー及び在留資格説明会

この春、広島市留学生会館には新たに十か国二十九人の外国人留学生が入居しました。

会館では留学生の生活支援事業として、防犯と在留資格について理解を深めるセミナー・説明会を平成二十四年四月二十二日（日）に開催しました。

防犯セミナーでは広島東警察署の担当者から日本の交通ルールについて説明を聞き、留学生の多くが利用する自転車の事故防止や事故対応について、運転の実演により分かりやすい説明を受けました。

また、盗難、ひったくり、痴漢の防止策と対処方法についても学び、外国人登録証やパスポートの携帯義務を含め、警察官から職務質問を受ける際の注意事項も聞きました。

最後に、非常時の護身術についても学びました。署員の実演の後、二人一組になった留学生は、初めての経験に戸惑いながらも基本的な護身動作を確認し

あいました。

留学生は、「日本は安全な国」という思い込みを改め、自身で身を守ることの重要性を認識しました。

防犯セミナーの後は特定非営利活動法人ビザサポートセンター（広島市長尾理枝さん（行政書士）から、外国人登録制度に代わり本年七月から新たにスタートした管理管理制度を中心に説明を受けました。

十一か国三十八人の参加者からは、「日常生活で役に立つ知識を勉強できて大変良かった。」「初めて日本に来たので、大変良い機会だった。」という声が多く寄せられました。

（広島市留学生会館）



道着の警部補による護身術の指導

「姉妹友好都市の日」記念イベント 市民が海外 文化を堪能

広島市は、海外に六ある姉妹・友好都市を市民のみなさんに身近に感じ、友好の持つ意味をより深く理解していただくため、都市ごとに「姉妹・友好都市の日」を設けて記念イベントを開催しています。各イベントの進行役は公募で選ばれたヒロシマ・メッセンジャーの方が務めました。

大邱の日
五月三日(木)から五日(土)まで、ひろしまフラーフェスティバル会場で「大邱の日」記念イベントを開催しました。主催「平成二十四年度大邱の日実行委員会」

三日(木)にカーネーションステージで記念セレモニーを行い、安東善博実行委員長、松井一貫広島市長、辛亨根駐広島大韓民国総領事館総領事の挨拶に続き、呂博東大邱日本協会会長が大邱市長メッセージを代読しました。続いて、韓国歌手の明成姫さんの歌唱の披露、在日本大韓国民団青年会広島県本部の皆さんによるサムルノリ(農楽が起源の韓国音楽)の演奏に続

き、大邱広域市の啓明大学テコンドー部の皆さんによる演武があり、多くの来場者はバラエティに富んだステージに魅了されていました。



大邱の日
啓明大学テコンドー部の皆さんによる演武

また、三日間を通して、「韓国・大邱マダン(ひろは)」を設け、大邱広域市を中心に韓国の文化等を紹介しました。「大邱広域市・韓国紹介コーナー」では、大邱広域市の物産や観光情報などを広く来場者にPRしました。

毎年人気の「韓服(チマチョゴリ)を着て記念撮影」や「韓国検定」などのコーナーでは、韓国留学生らと来場者が楽しく交流しました。このほか、毎年好評の韓国の家庭料理の販売コーナーは、多くの家族連れなどで賑わいました。

また、平和記念資料館本館下では、姉妹都市提携を記念して大邱広域市から広島市へ贈呈された「大邱大太鼓」の演奏や、来場の子ども

たちによる大太鼓打ち鳴らし体験などを行い、こちらも大いに盛り上がりました。

期間中、これらの会場には、約八千五百十人の来場者があり、催しは大変盛況のうちに終わりました。

ハノーバーの日

五月二十七日(日)、広島市留学生会館で「ハノーバーの日」記念イベントを開催しました。主催「平成二十四年度ハノーバーの日実行委員会」

ハノーバーと交流の深い上田宗簡流茶道の体験、本場ドイツ製法のソーセージの試食、パウムクーヘンの試食、ドイツ人マイスターによるドイツ菓子作りの実演、ルツェンラーゲ(二つのグラスに異なる酒等を注ぎ、一気に飲み干す。)を行いました。

またホールでは、セレモニーの



ハノーバーの日
パウムクーヘンの試食

後、ハノーバー出身の留学生によるハノーバーの街や企業等の紹介を行い、その後「ドイツ音楽コンサート」では、四組のプロの音楽家がドイツ関連の音楽を中心に素晴らしい演奏を披露しました。最後に来場者全員で「野ばら」を合唱し、会場が一体となって終了となりました。

このほか、ハノーバー・ドイツの紹介展示では、広島市とハノーバー市の交流のパネル展示、ハノーバー電車のペーパークラフト体験、ドイツ絵本の紹介・読み聞かせを行い、各コーナーとも大好評でした。

約三百二十人の来場者があり、多彩なプログラムを通し、楽しくハノーバーやドイツへの理解を深めていました。

モントリオールの日

七月八日(日)、広島市留学生会館で記念イベントを開催しました。主催「平成二十四年度モントリオールの日実行委員会」

まず来場者は、スモークミートやベーグルなどのモントリオールのグルメに舌鼓を打ちました。

セレモニーの後、モントリオール出身のラモテ・ギョームさんがモントリオール市の紹介を、同市出身のエステル・エベールさんが、自身の撮影したドキュメンタリー作品の紹介を行いました。

記念コンサートでは、国際的ジャズフェスティバルで有名なモントリオールにちなみ、ジャズコンサートを行いました。広島市在住の岸本優子さん、トム・サザンさん、石井聡至さんのトリオが、「A列車で行こう」やジャズ風にアレンジした「荒城の月」等を披露し、会場は大いに盛り上がりました。

イベントの最後には、メープルシロップや、スモークミートなどの特産品が当たるお楽しみ抽選会を行いました。



モントリオールの日
お楽しみ抽選会

このほか、カナダ特産品の展示や、モントリオール出身の作家フレデリック・バックの紹介等を行いました。

約三百二十人の来場者は、楽しみながらモントリオールやカナダへの理解を深めていました。

(国際交流・協力課)

国際交流員からのメッセージ

JETプログラムにおける国際交流員としての職務と責任

広島市国際交流員

クリストファー・キャメロン



平成二十三年八月からの一年間、日本に住みながら経験した色々な出来事、広島平和文化センターでの仕事の様子などを皆さんにご報告したいと思います。

JETプログラムについて初めて知ったのは高校最後の年でした。当時はALT(外国語指導助手)のことしか知りませんでした。CIR(国際交流員)に関しては大学二年生の時に初めて恩師から教わり、すぐに興味がわきました。

以前から日本文化や日本語に興味があり、もっと知りたい、日本へ行きたいと思っていました。そこで、大学三年生の時に(ニュージールランド)の大学の在籍期間は三年です。JETプログラムのCIR業種に申し込み、翌年から広島平和文化センターで働くことになりました。

多くの人が「CIR」についてあまり知らないと思います。聞いたことのある人でも、CIRは事務所に

いつもいて、翻訳ばかりしているという先入観を持っている人が多いと思います。しかし、実際は違います。

広島平和文化センターでのCIRとしての私の役目は、草の根レベルの国際交流と異文化理解の推進です。私が所属している国際交流・協力課は、広島市で行われる国際交流イベント等の企画・実施を行っています。また、広島に住んでいる外国人市民の生活を支援するため、生活に関する情報の提供や、通訳者を派遣するなどの事業を行っています。

私の仕事は、市内の学校を訪問し国際交流・国際理解に関連する授業へ参加すること、事務所では国際交流イベントの企画の手伝い、英文翻訳や校正などを行っています。また、毎月第四水曜日を「国際交流員の相談日」に設定し、市民の人たちの異文化や英語などに関する質問に応じています。

広島市内の学校、幼稚園、公民館等への訪問が私の主な仕事です。依頼の多い時は、週に二、三回、訪問します。この派遣事業では、パワーポイントなどを利用し、日本との文化的・地理的な相違点などを説明しながら出身国であるニュージールランドを紹介しています。その後は、子供たちと一緒に給食を食べたり、ゲームをしたりします。プレゼンテーションを面白くするために、沢山の映

像を使い、子供たちが興味を持つ面白いテーマを取り上げるよう努めています。子供たちが外国や異文化に興味を持ち、世界に興味を持ってくれることを期待しています。

今まで一番思い出に残っている訪問は、昨年十二月に、ある保育園からの依頼でサンタさんとしてクリスマス会に参加したことです。子供たちは、「サンタだ!」と大喜びでした。わざわざ北極から自分たちに会いにサンタが来てくれたのが信じられない様子でした。興奮して泣き出す子もいました。



サンタさんとして保育園を訪問

昨年、「ペあせろべ」と「国際交流・協力の日」という二つの大きな国際交流イベントに参加しました。「ペあせろべ」は、広島に住んでいる外国人と市民団体が一緒に行う国際交流イベントです。外国人参加者は自分の国の伝統文化や衣装、料理などを

紹介します。屋台を出店したり、ステージで踊りなどを披露します。私は、生まれて初めてステージ上で司会をし、通訳もしました。大変緊張しましたが、周りの人々に大変親切にしていたきました。

「国際交流・協力の日」は毎年十一月に行われます。「国際交流・協力の日」には、主に広島市内で国際交流・協力活動を行っている市民団体、企業などが中心となって様々な国際交流・協力に関する事業を行います。去年は七千人が参加しました。私は、日本語のチラシを英語に訳したり、イベントを手伝ってくれる外国人との連絡調整係をしました。当日はニュージールランド紹介コーナーを設置し、写真などを掲示して、ニュージールランドの歴史、文化、スポーツなどを紹介しました。今年は昨年よりもよりよいイベントになるよう、積極的に取り組んでいこうと思っています。

仕事への思い、今後の抱負、これからCIRになる人たちへのアドバイス

広島平和文化センターでのCIRの仕事はともやりがいがあると思っています。学校訪問やイベントへの参加を通じて、草の根レベルの国際交流活動に積極的に参加し、市民のみなさんにも何らかの刺激を与えられていると感じています。学校訪

問で経験を重ねるおかげで、プレゼンテーション能力も向上し、多くの人の前で発表する自信も出てきました。また、大きなイベントが実施されるまでの作業・流れについても学ぶことができました。もちろん、通訳・翻訳の経験を積むこともできました。任期を終えた後はニュージールランドに帰国し、観光産業に携わりたいと考えています。CIRの仕事を通して得た経験・スキルは、将来、大いに役立つと思います。

CIRの職務は配属先によって様々です。CIRとして働くには、ある程度の日本語能力は必ず必要です。日本語能力試験一級や二級、大学で日本語を専攻している人が有利だという意見もあります。しかし、これからCIRになることを考えている人へアドバイスするとなれば、一番大事なのは人柄だということです。人と上手に付き合うことができる人であれば、何も心配することはないとアドバイスしたいと思います。

(*)「JETプログラム」語学指導等を行う外国青年招致事業(The Japan Exchange and Teaching Programme)の略称。(財)自治体国際化協会が実施しています。

【自己紹介】

名前：クリストファー・キャメロン
年齢：二十二歳
出身国：ニュージールランド
趣味：バスケットボール、タッチラグビー、トレッキング



プロフィール
 [わたなべ ともこ]
 平和都市・広島を活動の拠点とし、国際協力・平和教育活動にたずさわっている。
 また、広島市民や子どもたち、広島を訪れる海外の研修生などを対象として国際理解や平和教育を実践し、独自の平和構築活動をおこなっている。

“平和について思う”

グリーン・レガシー・ヒロシマ
 ・イニシアティブの誕生

特定非営利活動法人ANT-Hiroshima 理事長
 渡部 朋子

第二回広島アニメーションフェスティバル（一九八七年）でグラップリに輝いたフレデリック・バック作の「木を植えた男」という美しいアニメーションを保存しようか？

一人の男が、その生涯をかけて黙々と木を植えつづけ、荒野を緑の森に変えてゆくという、詩情あふれ心揺さぶられる美しいアニメーション作品です。「木を植える」という行為はシンプルですが美しく悦びがあります。そして誰にでもできることです。また植えた木を大切に守り育てていく過程で、命のめぐり―生と死―自然と共生する大切さ、多様性、寛大さなど、私たちは木から多くを学び、励まされ、力を与えられます。「木を植えることは平和をつくること」私はそう感じています。

広島は一九四五年八月六日、一発の原子爆弾によって廃墟と化し、七十五年間草木も生えないと言われていました。しかし、その同じ年に廃墟でカンナや夾竹桃などの花が咲き、焼け焦げた樹木が再び芽吹き、その姿に多くの市民は勇気づけられ、生きる希望をみいだしました。現在、広島市内の爆心地から半径二キロメートル以内にある原爆を生きのびた「被爆樹木」は、五十五カ所、約百七十本が現存しています。



今年3月30日に行われた植樹式。
 平和大通り緑地帯に、被爆樹木(柿)の二世の若木が植樹されました。

ナスリーン・アジミ ユニタール (UNITAR/国連訓練調査研究所) 本部長付特別上級顧問は、被爆樹木についてこう語ります。「長年、広島のを散策しているうちに、私は広島の特長な住人―原爆を生きのびた樹木とその子孫の木の回復力、寛大さ、美しさ、そしてとりわけ、それらの樹木がもつ大切な意義を知ることになりました。核の悲劇の生存者である被爆樹木は、広島に住む人びとや広島を訪れる人びとに対してだけではなく、全人類に対して重要なメッセージを伝えていきます。」

私は、共同創設者とコーディネーターとして、二〇一一年七月から二〇一二年六月までの一年間、ユニタールとNPO法人ANT-Hiroshimaの協力のもと、「グリーン・レガシー・ヒロシマ・イニシアティブ」を実施いたしました。このイニシアティブは、広島市の被爆樹木の種

や苗を世界中で育てていくことで、これらの樹木を守り、その存在と意味とを広く知らせていくことを目的としています。

パイロット期間の一年間の活動で、多くの方々の協力―特に、現在グリーン・レガシー・ヒロシマのかけがえのないワーキンググループメンバーとなった(公財)広島平和文化センター、広島市、広島市植物公園、広島大学、広島県、その他園芸専門家やボランティアの方々からの協力―を得て、世界のほぼすべての大陸に広島市の被爆樹木の種を送ることができました。

した。

樹木医の堀口力さんをはじめとするこれまで長く被爆樹木を守り育てて下さった方々、また昨年亡くなられた被爆者の沼田鈴子さんのように、被爆樹木のアオギリを愛し、その希望のメッセージを世界各地に届けて下さっていた多くの市民の皆様のおかげでの努力と歩み、「グリーン・レガシー・ヒロシマ・イニシアティブ」を成功に導いてくださったものと確信しています。各人に感謝の言葉を伝えることは難しいですが、皆様のご尽力とご協力で心からの敬意と感謝を捧げていきます。

この世界に広がる理想と活動をより首尾一貫した組織的な形で追及するために、二〇一二年七月一日に任意団体「グリーン・レガシー・ヒロシマ・イニシアティブ」を設立しました。(http://www.untar.org/greenlegacyhiroshima)

世界中の多くのパートナーがこのイニシアティブに参加し、それぞれの国で広島の平和のメッセージと緑の遺産を積極的に伝える大使となってくださることを祈念しています。

皆様、一緒に木を植えましょう！

“ヒロシマの心”を発信する人々

平和の音色を届けて

矢川ピアノ工房 ピアノ調律師
矢川光則さんに聞く

その活動の中で、原爆の廃墟の中で奇跡的に無事だったピアノを、その所有者から託されました。貴重な被爆資料として、できるだけ部品は変えずに修復しているのが、当時（被爆前）とほぼ同じ音色を聞くことが出来ます。現在は四台が私の工房にあります。



被爆ピアノ「ミサコのピアノ」。爆心地から1.8kmの民家にあった。建物がコンクリート造りだったため焼失は免れたが、表面には無数の傷が残る。椅子も当時のまま。

まで四十三の都道府県でコンサートを行ってきました。二〇一〇年、アメリカ・ニューヨークでの同時多発テロの犠牲者追悼のための被爆ピアノのコンサートが、世界でもコンサートを開くきっかけになりました。アメリカは原爆を投下した国ですから、国内からも色々と批判がありました。アメリカ側からは、亡くなった私の父も昔は消防士だった縁で、ニューヨーク市消防局の全面協力を受けることができました。（二〇一〇年九月十一日のアメリカ同時多発テロでは、救助に向かったニューヨーク市の消防士、三百四十三人が犠牲となりました。）

核兵器は使ってはいけない、恐ろしい兵器だと理解されているようでした。これは、広島・長崎がこれまでずっと訴え続けてきたことの成果だと思えます。

コンサートが開かれるまで

ピアノの調律だけでなく、輸送やピアノリストの手配も殆ど自前で行っています。一番重いグランドピアノはさすがに運べないので輸送業者に頼みますが、その他のピアノは工房でピアノを分解・梱包してトラックに乗せ、自分で運転して目的地まで運びます。現地を組み立て、会場に設置し、コンサートが終わると同じように自分で運んで工房に戻ります。最近は何回も百四十回程度の依頼があり、これまで各地で九百回以上のコンサートをやってきました。

は、最近は何回も百四十回くらいでしょうか。コンサートの前に話を頼まれた時は、要約して短く終らせるような気を付けています。子ども達に「広島に行ったら辛い話を長々と聞かされた」と落ち込んで欲しくないのです。辛い話もありますが、子ども達には希望を持って、また広島に戻ってきてもらいたいのです。

これからの活動について

日本国内でも、広島・長崎以外の人には、被爆の実相がまだまだ伝わっていません。「被爆ピアノから放射能が出ていますか？」という質問を受けることもあります。無知や偏見からくる質問を受けた時にも、きちんと答えることが出来るよう、自分でも基本的なことを勉強しています。被爆ピアノのコンサートを続けることは平和の種まきのようなものです。

ですが、この活動を息子に継がせたいとは思いません。息子もピアノの調律や修復を学びましたが、被爆三世である彼の時代には、この活動が終わっていいんじゃないかと思えます。被爆者の時代に無理なら、せめて被爆二世の私の代で核兵器を廃絶し、そこから先には核兵器の無い平和な時代が来ることを願っています。

（平成二十四年八月取材）

毎年八月六日、平和記念公園の被爆アオギリの傍らで「アオギリ平和コンサート」が開かれていきます。美しい音色を響かせるのは「被爆ピアノ」。このピアノを修復し、各地で平和コンサートを開いておられる矢川光則さんにお話を伺いました。

被爆ピアノとの出会い

二十年ほどまえにピアノ工房を立ち上げて以来、家庭に眠っているピアノを引き受けて再生し、国内外の学校などの施設に贈るボランティア活動を行ってきました。

コンサートを開くきっかけは

二〇〇一年に、被爆者の沼田鈴子さんとアオギリ平和コンサートを始めました。被爆アオギリの下で、沼田さんの被爆体験証言と被爆ピアノのコンサートを組み合わせる試みです。

二〇〇四年に長崎平和音楽祭に招かれ、それが県外でも被爆ピアノのコンサートを開くきっかけになりました。被爆六十周年に当たる二〇〇五年には愛知万博でコンサートを行い、その他にも、これ

私の父は、当時は大手町にあった広島西消防署（爆心地から約八百メートル）で被爆しました。父は、当時の消防士が腰に下げた刀で、崩れた天井を破って脱出し、生き延びました。父の体験は「原爆広島消防史（広島市消防局発行・一九七五年）」に詳しく載っています。

ニューヨークでは現地の人々から話を聞く機会も多かったのですが、建前は別として、七、八割の人は核兵器に反対しているように感じました。それが、広島・長崎の後、一度も核兵器が使われていない理由ではないでしょうか。



爆心地から2kmの小学校にあったグランドピアノ。6本脚で、重さは600kg以上。破損が大きく、矢川さん（手前）により大幅に修復された。

修学旅行生のためのコンサート